

Jane Austenの小説にみる品詞転換の文体的効果

松谷 緑*

Stylistic Effects of Conversion in the Novels of Jane Austen

MATSUTANI Midori*

(Received September 29, 2023)

品詞をどう特定するかは議論のあるところである。基本的な文法を学ぶ際、この単語は名詞、これは動詞と、単語に貼り付けられた特徴のように教えられるし、そうした品詞分類は言語現象を理解するには有効である。しかし、実は、品詞を決定する基準は必ずしも明白ではない。辞書での記述も一つの語に複数の品詞が示されていることは多い。英語の歴史的背景からいえば、形態の特徴、統語の特徴いずれからも捉えることができ、複雑である。ただ、実際の使用においては、言語使用者は、英語の歴史とは関係なく、自分の知識の範囲で自分の知っている語彙を駆使するのである。その点で、品詞転換という現象は、言語使用者の創造的な活動という捉え方もできる。本稿は、主に共時的観点から、小説の言語にみられる品詞転換の現象を記述し、それがどのような文体的効果をもたらすかを明らかにする。一語レベルにとどまらず、句や節が文中で果たす役割も含めて分析を試みるものである。

はじめに

品詞転換 (conversion) とは、簡潔に言えば、「ある語を接辞付加などの操作により語形を変化させることなく他の品詞として転用すること」と定義することができる。しかしながら、英語における品詞の概念をどう定義づけるか、また、個々の語の品詞をどう特定するかは必ずしも明白に標識付けできるわけではない。英語の歴史の大きな流れにおいて接辞を消失していったことや、文構造における役割による分類といったところでラベリングは単純ではないのである。本稿では、主に共時的観点から小説の言語にみられる品詞転換の現象を分類し、その文体的効果の可能性を明らかにする。テキストとして、近代英語期後期に小説というジャンルの成熟に大きな役割を果たした Jane Austen (1775-1817) の作品 *Mansfield Park* (1814) と *Emma* (1816) を取り上げる。

テキストとして取り上げる *Mansfield Park* と *Emma* は近代英語期後期の時代の作品で、この時代は現代英語の体系がほぼ整ってきた時代と言えるが、まだ文法の詳細や語彙の面において、現代英語とは異なる点も多い。本稿では、その相違に触れることを目的としないが、以下に取り上げる例の英語において、例えば、every body [15] any body, any thing [48] といった語句が

2語で綴られていることや、staid [39] (= stayed) / chusing [46] (= choosing) という綴りがみられること、あるいはカンマの使い方等句読法において現代のもの異なること等、当時の英語の特徴が垣間見られるところもある。

1. 品詞転換の通時的側面と共時的側面

ある特定の特徴を持つ語類をまとめて表現する概念は、言語現象を観察し考察するに際し、有効である。例えば、a pretty dress や a tall building といった名詞句において、冠詞と名詞の間にあって、名詞を修飾する語を形容詞とすることにおそらく何ら躊躇するところはないであろう。いっぽうで、例えば、a noun phrase における noun はどうであろう。構造上は a pretty dress や a tall building と同様、冠詞と名詞の間に挟まれ名詞を修飾する役割を果たすが、noun という語自体を取り上げた際、名詞という分類の下にあるものでもある。別の観点から、接辞 -ly の付加によって副詞 quickly が、-ness の付加によって名詞 quickness が派生されるというような現象は、その品詞の分類上はわかりやすい。現代英語において、そういった接辞による品詞の判断は限られた範囲でしか有効ではないが、接辞付加による造語は語

* 山口大学名誉教授, 〒753-8513 山口市吉田1677-1, mmatsu@yamaguchi-u.ac.jp

彙の拡大にも貢献する。英語の歴史上、Shakespeare は様々な方法で語彙を拡大した作家として有名である。品詞転換もその一つの方法であることに間違いないが、具体的な事例においては、作家が行った品詞転換なのか、その語の歴史的背景から存在している現象なのかは判断が難しいところもある。例えば、名詞から動詞に品詞転換させた例として ‘Season your admiration for a while’ が Crystal (1993: 62) では挙げられているが、編注者は、古フランス語で名詞 *seson* から動詞 *saisonner* が派生し、それぞれが中英語期に借入されたと考えるべきで、共時的にも名詞の「季節」と動詞の「味つけする」という意味の間に品詞転換の際に予想されるような強い意味関係が感じられないとしている (Crystal 1993: 193)。

以上のように、品詞の分類や品詞転換の現象について、英語の語彙が辿ってきた歴史的経緯、形態論の基準と統語論の基準の関係、具体的な文におけるその語の役割と意味といった観点から、多様な分析は可能であるが、本稿では、主に共時的観点から、近代英語期の小説をとりあげ、談話における文体的効果に注目する。その際、一語レベルにとどまらず、句や節が文中で果たす役割も含めて分析を試みる。

2. 品詞転換と文体的効果

以下、Jane Austen の小説 *Mansfield Park* と *Emma* のテキストにみられる品詞転換の現象を記述し考察する。テキストからの引用は全て関西大学出版部『Jane Austen *Mansfield Park*』Vols. I~III 及び『Jane Austen *Emma*』Vols. I~III の版による。引用の下線部は引用者によるものであり、出典箇所については、略号 MP あるいは E を用い、その後に巻数とページ数を [MP I 123] のように引用の末尾に示す。

2. 1 名詞→動詞

次の引用は、Phillipps (1970: 200) が、名詞から動詞への品詞転換の例として挙げている。ここでの *distance* は ‘place at a distance’ という意味で動詞として用いられている。*Mansfield Park* に *distance* は25回使用されているが、他の24回はすべて名詞である。

[1] To be going so soon, sent for so kindly, sent for as a comfort, and with leave to take Susan, was altogether such a combination of blessings as set her heart in a glow, and for a time, seemed to distance every pain, ... [MP III 177]

この語の動詞への品詞転換は *Emma* にも見つけられる。

[2] Mr. Knightley and Harriet Smith!—It was an union to distance every wonder of the kind. [E III 117]

[3] は *condition* の自動詞用法として OED にも採用されている例である。

[3] In this state Frank Churchill had found her, she trembling and conditioning, they loud and insolent. [E III 25]

同様に ‘make conditions’ という動詞の意味での使用が他にも散見される。

[4] ‘... A gentleman’s family is all that I should condition for.’ [E II 183]

[5] ‘... he should absolutely condition with his uncle for attending them whenever he might be wanted. [MP II 24]

Phillipps (1970: 200-201) は、Jane Austen は固有名詞をさえ大胆に動詞に転換させて用いていると述べ、次の箇所をその例としてとりあげている。

[6] ‘... “Jane Fairfax and Jane Fairfax.” Heavens! Let me not suppose that she dares go about, Emma Woodhouse-ing me!— But upon my honour, there seem no limits to the licentiousness of that woman’s tongue.’ [E II 162]

この箇所は主人公である Emma の考えが独白のように語られているところであるが、固有名詞に *-ing* を付けて動詞として用いている。「私を Emma Woodhouse する」というのは、「私」を呼び捨てにするという意味である。以下の例も固有名詞を動詞に転用しているものである。

[7] ‘... She was nobody when he married her, barely the daughter of a gentleman; but ever since her being turned into a Churchill she has out-Churchill’d them all in high and mighty claims: but in herself, I assure you, she is an upstart.’ [E II 194]

[7] にみるような *out-* 固有名詞の用法については、OED で ‘outdo the person, etc., in question in his special attribute’ と説明しており、初例として、Shakespeare の *Hamlet* にある ‘It out-Herod’s Herod’ という表現を挙

げている。Phillipps (1970: 200) も、‘Jane Austen shows great freedom, and even daring, in her conversion ...’ と述べ、次の [8] についても興味深い例として取り上げている。‘To be, or not to be, that is the Question.’ は Hamlet の有名な台詞だが、構造的に *to-* 不定詞を ‘have we ...’ に続く過去分詞として用いているので、かなり自由な転換と言えるであろう。

[8] How many a time have we mourned over the dead body of Julius Cæsar, and to be’d and not to be’d, in this very room, for his amusement! [MP I 161]

[8] については、名詞を動詞に品詞転換というような単純な分類はできないが、二つの *to-* 不定詞を等位接続してそれぞれに接辞付加という構造となっており、一応、名詞用法の不定詞を動詞として処理しているものと考えてこの項に含めることとした。

2. 2 名詞 (句) → 形容詞

第一節で述べたように、統語的枠組みのみで品詞を判断するわけにはいかないが、[9] は、等位接続された名詞句に後続の名詞を修飾させる例である。

[9] “... A large income is the best recipe for happiness I ever heard of. It certainly may secure all the myrtle and turkey part of it.” [MP II 51]

2. 3 (句) 動詞 → (複合) 名詞

もともと2語であったものが - (ハイフン) で繋がれ、更に1語の複合語として機能するようになるという過程は語彙の拡大に寄与する一つのパターンとしてよく観察される。例えば、現代英語においては *breakup* という名詞は辞書のエントリにも挙げられているものであるが、そのもとは *break up* という動詞句である。[10] では *the final* という冠詞 + 形容詞構造の後に *break up* と2語で綴られている。[11] における *set out* は ‘a spread of food’ の意味で、OED にはこの箇所が引用されている。口語的な句動詞をもとに名詞を自由に作り出すのは Jane Austen の英語の特徴であると Phillipps (1970: 203) もこういった例をとりあげている。

[10] The chief of the party were now collected irregularly round the fire, and waiting the final break up. William and Fanny were the most detached. They remained together at the otherwise deserted card-table, talking very comfortably and not thinking of the rest, till some of the rest began to think of them. [MP

II 96]

[11] ‘Well—as you please; only don’t have a great set out. [E III 50]

[12] [13] では *cry out* が名詞句として用いられている。OED は ‘the act of crying out, exclamation, outcry’ と定義し、場所を明記してはいるが、*Mansfield Park* を初例としている。この小説ではこの句は [12] の箇所では使用されていないので、ここでの使用が初例ということであろう。さらに、OED では次例として [13] の例も挙げている。

[12] There was a general cry out at this. [MP I 98]

[13] there would be a general cry-out upon her extreme good luck. [E I 73]

[13] の例、また次の [14] の *put-off* も形式としては、2語がハイフンで繋がれている例である。

[14] ‘Yes, she would be, but that she thinks there will be another put-off. She does not depend upon his coming so much as I do: but she does not know the parties so well as I do [E I 144-145]

[15] は、もともとの動詞句が頻繁に使用されている会話の文脈が当該の句を名詞句として使用する背景にあることが観察され、興味深い。

[15] “... He will be taken in at last.”

“But I would not have him taken in, I would not have him duped; I would have it all fair and honourable.”

“Oh! dear—Let him stand his chance and be taken in. It will do just as well. Every body is taken in at some period or other.”

“Not always in marriage, dear Mary.”

“In marriage especially. With all due respect to such of the present company as chance to be married, my dear Mrs. Grant, there is not one in a hundred of either sex, who is not taken in when they marry”

(中略)

“... I know so many who have married in the full expectation and confidence of some one particular advantage in the connection, or accomplishment or good quality in the person, who have found themselves entirely deceived, and been obliged to put up with

exactly the reverse! What is this, but a take in?" [MP I 55-56]

[16] も会話の文脈において生じた例と言えるであろう。「頼めばもらえると思っていた」というのを簡潔に表現している。

[16] "You would find it difficult, I dare say, just now, in the middle of a very late hay harvest, to hire a horse and cart?"

"I was astonished to find what a piece of work was made of it! To want a horse and cart in the country seemed impossible, so I told my maid to speak for one directly; ... I thought it would be only ask and have, and was rather grieved that I could not give the advantage to all ... [MP I 72]

2. 4 副詞(句)→名詞

[17] は OED で初例として挙げられている箇所、OED ではこのコロケーションを *IN adv. + BETWEEN prep. or adv.* と分析している。[17]～[21] いずれの句も冠詞を伴っており、統語的環境から名詞句への品詞転換となっていると判断できる。更に [17] [18] [19] では前置詞とともに用いられ、[17] [20] では接辞 *-s* が付加されている。[21] では *at last* というイディオムの前に不定冠詞が置かれており、2語をまとめて名詞として扱っている。文脈上、直前の *at last* を繰り返すことで「ようやく...」という気持ちが強調されている。

[17] She was so busy in admiring those soft blue eyes, in talking and listening, and forming all these schemes in the in-betweens, that the evening flew away at a very unusual rate; [E I 27]

[18] Mrs. Rushworth submitted, and the question of surveying the grounds, with the who and the how, was likely to be more fully agitated, [MP I 112]

[19] EMMA continued to entertain no doubt of her being in love. Her ideas only varied as to the how much. [E II 137]

[20] She was in gay spirits, and would have prolonged the conversation, wanting to hear the particulars of his suspicions, every look described, and all the wheres and hows of a circumstance which highly entertained her: [E III 45]

[21] At last—it seemed an at last to Fanny's nervousness, though not remarkably late,—he began to talk of going away; but the comfort of the sound was impaired by his turning to her the next moment, and saying, "Have you nothing to send to Mary? No answer to her note? She will be disappointed if she receives nothing from you. Pray write to her, if it be only a line."

"Oh! yes, certainly," cried Fanny, rising in haste, the haste of embarrassment and of wanting to get away—"I will write directly." [MP II 171]

2. 5 名詞句→副詞

次の例は *in every way* という前置詞句の前置詞が省略されたものということもできるであろうが、語順が *her due* の前になっている点が興味深い。ちなみに Jane Austen の小説では *in every way* というコロケーションも用いられる。

[22] Had she followed Mr. Knightley's known wishes, in paying that attention to Miss Fairfax, which was every way her due; [E III 126]

2. 6 形容詞→名詞

以下の例では、形容詞が、冠詞と前置詞句に挟まれた位置で、統語的環境から名詞への品詞転換となっていると判断できる。Phillipps (1970: 202) は 'Adjectives are also converted freely into nouns.' として、[24] の例や Jane Austen の他の作品や手紙からも例を挙げている。

[23] She ran away to indulge the inclination, leaving the tender and the sublime of pleasure to Harriet's share. [E I 99]

[24] I absolutely cannot do without music. It is a necessary of life to me; [E II 152]

2. 7 発話を文の要素とする構造

ここでは、発話そのものが文の要素として組み入れられた構造に注目する。本来は、品詞転換という場合、一語ないしは、既にみてきたように、イディオム化している数語の句の単位での機能の転換と承知するが、小説の言語の特徴や談話の文体を考察するうえで、ここで取り上げる現象は極めて興味深いものだと考える。以下で記述するのは、いわゆる直接話法の被伝達部、つまり、人物の発話そのものが文の要素として組み入れられている例である。基本的に、直接話法の被伝達部は *say* など

の伝達動詞の後に引用符で示されるのが基本の形式であり、また、複数の登場人物の会話が伝達部無しに続く場合もある。しかし、小説ではそれのみならず、作家は様々な工夫をして談話を構築し、場面を描いている。

次の例では、*this question* の後に *with+* 引用符付きの “Yes” という前置詞句を含む関係詞節を挟み *had sometimes ...* と受ける述部内で引用符付きの “No” を含めるといふ少々複雑な構造を用いている。この後の語りの中でも ‘... on this circumstance the “no” and the “yes” had been very recently in alternation.’ (MP II 105) と揺れる気持ちが描かれる。

[25] The issue of all depended on one question. Did she love him well enough to forego what had used to be essential points—did she love him well enough to make them no longer essential? And this question, which he was continually repeating to himself, though oftenest answered with a “Yes,” had sometimes its “No.” [MP II 104-105]

[26] では、発話の前に代名詞の所有格 *her* を伴い、また、[27] は形容詞を伴う構造で、発話がどのように響いたかが描かれている。

[26] In vain was her “Pray, Sir, don’t—pray, Mr. Crawford,” repeated twice over; and in vain did she try to move away— [MP III 42]

[27] And these were her longest speeches and clearest communications; the rest was only a languid “Yes—yes—very well—did you? did he?—I did not see *that*—I should not know one from the other.” This was very bad. [MP II 141]

次の例はある人物の発話内で他の人物の台詞を引用している部分である。

[28] But there he is, and, by the by, his absence may sufficiently account for any remissness of his sister’s in writing, for there has been no ‘well, Mary, when do you write to Fanny?—is not it time for you to write to Fanny?’ to spur me on. [MP III 110-111]

こういった例の存在をみると、発話を談話の中に自由に取り込む構造は口語的な特徴を持つということが言えるであろう。話し言葉では間や抑揚が重要な役割を果たし、話者が少々複雑な構造を用いることになっても、聞き手

は理解することができる。小説は書き言葉を媒体とするが、発話を巧みに語りに取り入れることで、生き生きとした会話の場面を読者に想起させることができるのである。

2. 7. 1 発話の一部を効果的に文の要素に据える

場面における登場人物の特徴的な言葉や感嘆詞を効果的に取り入れて文の要素として用いている例を挙げる。

[29] relating every thing with so blind an interest as made him not only totally unconscious of the uneasy movements of many of his friends as they sat, the change of countenance, the fidget, the hem! of unquietness, ... [MP II 13-14]

[30] This was not so very easy a question to answer, and occasioned an “Oh!” of some length from the fair lady before she could add “You ought to be in parliament, or you should have gone into the army ten years ago.” [MP II 52]

[31] Fanny was too urgent, however, and had too many tears in her eyes for denial; and it ended in a gracious, “Well, well,” which was permission. [MP II 137]

2. 7. 2 発話を文の主語の位置に据える

次の例では、実際に発話された言葉を主語に据えて、その発話後の展開の説明につなげている。[32] では不定冠詞が伴われ、“*there he is*” という言葉が口をついて出た様子を効果的に描いている。[34] [35] [36] では発話部に形容詞が添えられ、その言葉がどのように響いたかも簡潔に説明されている。

[32] ... they were united, and a “there he is” broke at the same moment from them both, more than once. [MP I 101-102]

[33] In a few minutes Sir Thomas came to her, and asked if she were engaged; and the “Yes, sir, to Mr. Crawford,” was exactly what he had intended to hear. [MP II 131]

[34] This was enough to determine Sir Thomas; and a decisive “then so it shall be,” closed that stage of the business; [MP III 76]

[35] A tap at the door roused her in the midst of this attempt to find her way to her duty, and her gentle “come in,” was answered by the appearance of one, before whom all her doubts were wont to be laid. [MP I 195]

[36] ‘... As an old friend, you will allow me to hope, Miss Fairfax, that ten years hence you may have as many concentrated objects as I have.’

It was kindly said, and very far from giving offence. A pleasant ‘thank you’ seemed meant to laugh it off, but a blush, a quivering lip, a tear in the eye, shewed that it was felt beyond a laugh. [E II 174]

以下の例では、語りが単調で冗長になることなく、効果的に場面が描かれている。[39] 以降の例では複数の発話をまとめて主語に据えている。

[37] ... and “where is Fanny?” became no uncommon question, even without her being wanted for any one’s convenience. [MP II 40]

[38] Edmund knocked at her door in his way to his own.
“Well, Fanny, it is all happily settled, and without the smallest hesitation on your uncle’s side. He had but one opinion. You are to go.”

“Thank you, I am so glad,” was Fanny’s instinctive reply; [MP II 58]

[39] “Miss Price all alone!” and “My dear Fanny, how comes this?” were the first salutations. She told her story. “Poor dear Fanny,” cried her cousin, “how ill you have been used by them! You had better have staid with us.” [MP I 122]

[40] Miss Crawford, calling to mind an early-expressed wish on the subject, was concerned at her own neglect; —and “shall I play to you now?” —and “what will you have?” were questions immediately following with the readiest good humour. [MP II 42]

[41] They had been long so arranged in the indulgence of her secret meditations; and nothing was more consolatory to her than to find her aunt using the same language. —“I cannot but say, I much regret your being from home at this distressing time, so very trying to my spirits. —I trust and hope, and sincerely

wish you may never be absent from home so long again”—were most delightful sentences to her. [MP III 161]

[42] He turned away to recover himself, and when he spoke again, though his voice still faltered, his manner showed the wish of self-command, and the resolution of avoiding any farther allusion. “Have you breakfasted? —When shall you be ready?—Does Susan go?”—were questions following each other rapidly. His great object was to be off as soon as possible. When Mansfield was considered, time was precious; [MP III 179]

2. 7. 3 発話を文の目的語の位置に据える

以下の例では、実際に発話された言葉が前置詞の目的語の位置に据えられて語りが形成されている。[43] では話者の声が低い様子が、[44] では、Lady Bertram が口火を切る様子が描かれている。[44] の場面に続くその後の夫婦の会話は直接話法で展開する。[47] では *than* の後ろに長い伝達部が続く。こういった例については、伝達部が文の要素というよりは、発話を提示する語りの一つの方法という印象が強い。

[43] she called him back again, when he had almost closed the door, with “Sir Thomas, stop a moment—I have something to say to you.”

Her tone of calm languor, for she never took the trouble of raising her voice, was always heard and attended to; and Sir Thomas came back. [MP II 56]

[44] It began, on Lady Bertram’s part, with, “I have something to tell you that will surprize you. Mrs. Grant has asked Fanny to dinner!”

“Well,” said Sir Thomas, as if waiting more to accomplish the surprize. [MP II 56-57]

[45] ... and now and then the quiet observation of “My poor sister Bertram must be in a great deal of trouble.” [MP III 157]

[46] She was almost at the door, and not chusing by any means to take so much trouble in vain, she still went on, after a civil reception, a short sentence about being waited for, and a “Let Sir Thomas know,” to the servant. [MP II 160]

[47] But, on the contrary, it was no worse than, “I am

sorry to say that I am unable to answer your question. I have never seen Fanny dance since she was a little girl; but I trust we shall both think she acquits herself like a gentlewoman when we do see her, which perhaps we may have an opportunity of doing ere long.” [MP II 98]

3. 発話の提示と人物描写

ここまで、発話も含め、語句の品詞転換の現象を記述してきたが、特に、発話の例について、*Emma*よりも*Mansfield Park*からの例が多いことがわかる。Jane Austenという作家は、特に小説というジャンルが充実してゆく近代英語後期にあって、その語りの技法を駆使したという批評は多く、*Mansfield Park*においても*Emma*においても、間接話法・直接話法・自由間接話法を様々利用している。*Mansfield Park*と*Emma*で語りの様相が異なる一つの要因として主人公のタイプの違いが考えられる。*Mansfield Park*の主人公Fannyはその置かれている環境において弱者の立場で、引っ込み思案な性格として描かれる。一方、*Emma*の主人公Emmaは富裕な家の女主人ともいえる立場で、美貌と才気に富む女性として描かれる。作家はそういった人物像を言語を通じて描き出すのであるが、当然、当時の社交における会話の場面の描き方がたいへん重要な役割をはたす。小説の読者は物語を読み進めるうちに、登場人物像を形作ってゆくのである。Fannyの引っ込み思案な、しかし、一方で、思慮深く成長してゆく様子は、語り手が彼女の代弁をすることによって読者に伝えられることも多い。

会話における様子も作家の選択する談話構造によって巧みに描き出されている。Phillipps (1970:204-205) は幼いFannyと彼女が信頼する人物となる優しいEdmundとの下記のやり取りを引用し、体験叙法(Erlebte Rede)の優れた例だと指摘している。

[48] “My dear little cousin,” said he with all the gentleness of an excellent nature, “what can be the matter?” And sitting down by her, was at great pains to overcome her shame in being so surprised, and persuade her to speak openly. “Was she ill? or was any body angry with her? or had she quarrelled with Maria and Julia? or was she puzzled about any thing in her lesson that he could explain? Did she, in short, want any thing he could possibly get her, or do for her?” For a long while no answer could be obtained beyond a “no, no—not at all—no, thank you;” but he still persevered, and no sooner had he begun to revert

to her own home, than her increased sobs explained to him where the grievance lay. He tried to console her.

“You are sorry to leave Mamma, my dear little Fanny,” said he, ... [MP I 16]

本稿の観点としては、下線部、Fannyの短い言葉が語りの文の要素として提示されているところに注目したい。

2. 7. 2で取り上げた[39]の例について、再度その場面の状況をもう少し文脈を広げて考察する。「聞こえてきた声や足音からFannyが待っていた人たちではなかった」ことが説明される流れとなっている。この会話の場面にはFannyもいるのだが、別の人物の声だけが直接引用され、語り手の語りの中に埋め込まれる形で提示される。Fannyの台詞は引用されず、読者には直接聞こえてこないのだが、その後に「かわいそうに」で始まる相手の台詞が直接話法で続けられている。

[49] She listened, and at length she heard; she heard voices and feet approaching; but she had just satisfied herself that it was not those she wanted, ...

“Miss Price all alone!” and “My dear Fanny, how comes this?” were the first salutations. She told her story. “Poor dear Fanny,” cried her cousin, “how ill you have been used by them! You had better have staid with us.” [MP I 122]

既に、[38]でFannyの発話が文の要素となっている例を取り上げたが、以下の例では、Fannyの心の声が引用符内に語られている。secret declarationというコロケーションが興味深い。

[50] “I never will —no, I certainly never will wish for a letter again,” was Fanny’s secret declaration, as she finished this. [MP III 151]

一方で、Fannyは成長とともに、文学好きだったり、思慮深かったりする側面を持つ。次の例は、実際の発話という性格のものではないが、彼女のそういった側面を詩の引用を口ずさむという描写で描いている。

[51] Her eagerness, her impatience, her longings to be with them, were such as to bring a line or two of Cowper’s *Tirocinium* for ever before her. “With what intense desire she wants her home,” was continually on her tongue, as the truest description of a yearning which she could not suppose any school-boy’s bosom to feel more keenly. [MP III 160]

おわりに

本稿では、主に共時的観点から小説の言語にみられる品詞転換の現象を分類し、その文体的効果を考察してきた。英語は、語の意味関係を形態操作によって表す言語から、その形態操作の多くを消失し、語順によって語の意味関係を表す言語へと、変化の歴史を辿ってきた。つまり、現在は主として文中での位置によりその語の役割を判断することになった。言語の経済性と生産性を考えると、品詞転換は語彙の拡大の一つの方法であることに間違いはないが、具体的な事例においては、その語の歴史的背景から一般的に慣用として定着し存在している現象もあれば、言語使用者がその場限りで行う場合もある。そのような言語使用は言葉遊び的な要素も備え、後世に名を遺すような作家が行った品詞転換は、後の世まで人々の印象に残るものとなる。

小説の言語において、発話を談話の中に自由に組み込む構造は、長い会話を単調になることなく描き、登場人物のキャラクター形成に資するといった効果、また、時に、口語的な特徴を持ち、生き生きとした会話の場面を読者に想起させる効果をもたらすということが言えるであろう。小説は書き言葉を媒体とするが、話法を駆使し発話を巧みに語りに取り入れることで、生き生きとした会話の場面を読者に想起させることが可能となるのである。

付記

本稿は科学研究費基盤研究（C）課題番号19K00419「18-19世紀の英国小説の語彙と文体：社会における人の認知と言語変化の観点から」の成果の一部である。

参考文献

- Crystal, D. 1993. *The History of English*. Tokyo: Kinseido.
- Gibbs, A. S.・樋口欣三・坂本武・島崎守・多田敏男・谷口義郎. 1994. 『Jane Austen *Emma*』 Vol. I, 大阪：関西大学出版部.
- Oxford English Dictionary, The*. Second edition. 1989. Oxford: Clarendon Press.
- Phillipps, K. C. 1970. *Jane Austen's English*. London: André Deutsch.
- 坂本武・住屋和子・谷口義郎・直野裕子・長谷川存古・松谷緑・李春喜. 2016. 『Jane Austen *Emma*』 Vol. II, 大阪：関西大学出版部.
- 坂本武・菟原美和・高橋美帆・瀧川宏樹・谷口義郎・直野裕子・長谷川存古・松谷緑. 2023. 『Jane Austen

Emma』 Vol. III, 大阪：関西大学出版部.

吉田安雄監修 田中逸郎・島崎守・谷口義郎. 1981. 『Jane Austen *Mansfield Park*』 Vol. I, 大阪：関西大学出版部.

吉田安雄監修 小川静代・多田敏男・長谷川存古. 1982. 『Jane Austen *Mansfield Park*』 Vol. II, 大阪：関西大学出版部.

吉田安雄監修 大西昭男・奥村透・A. S. Gibbs・坂本武. 1984. 『Jane Austen *Mansfield Park*』 Vol. III, 大阪：関西大学出版部.